

秋水通信

第31号

2021.12.15

幸徳秋水を顕彰する会
〒787-0010 四万十市古津賀 4-4-41
四万十市生涯学習課内
ホームページ
<http://www.shuusui.com/>
090-6827-9129 (田中全)
✉:l.zen-tanaka@heart.ocn.ne.jp

秋水非戦の碑 建立成る

十一月三日、秋水生誕百五十年を記念する非戦の碑の除幕式が行われた。(誕生日は十一月五日)

雲ひとつない秋晴れの下、コロナ禍の中にもかかわらず約百三十名が参加し、正福寺境内は熱気であふれた。(県外からは、札幌二、埼玉一、東京九、神奈川一、大阪五、兵庫一〇、岡山二、香川二、計三二名)

午後一時開会、冒頭、主催者を代表して幸徳秋水を顕彰する会の宮本博行会長が挨拶。

「秋水が自由・平等・博愛・平和の旗をかかげたたかった結果が戦後、永久平和、戦争放棄をうたった日本国憲法第九条として結実した。しかし、戦後七六年たつ今、安倍政権は憲法解釈を変更し、安保関連法案を強行採決、日本は再



除幕式

び戦争ができる国に変えられてしまつた。私たちはいまこそ反戦平和の原点である秋水の非戦論を心に刻み、平和を愛し守る国民総意の象徴としたいと願っている。きょうは秋水二つ目の顕彰碑ができたことを喜び合うとともに、秋水の非戦の訴えにわれわれも心を新たに、戦争のない平和な日本と世界をつくっていくことを決意する日にしたい。」

続いて、山泉進・大逆事件の真実をあらわかにする会事務局長(明治大学名誉教授)、中正正宏・四万十市長、森山誠一・森近運平を語る会会長(岡山)、上山慧・菅野須賀子を顕彰し名誉回復を求める会事務局長(大阪)、津野公男・大逆事件を明らかにする兵庫の会代表世話人、の五名が祝辞を述べた。幸徳家を代表して幸徳正夫さん(秋水



の義兄駒太郎のひ孫、東京都葛飾区)は謝辞を述べた。

「非戦の碑は今の世界情勢を考えるのタイムリー。泉下の秋水も喜んでいてと思う。人は二度死ぬという。しかし、秋水を顕彰する人が死ぬ限り、秋水が生きた時代を突き詰めようという人がいる限り、秋水は永遠に不滅だと思っています。」

地元の森信さんによる秋水絶筆漢詩「偶成」の吟詠で締められた。午後二時半から場所を市立文化センター大会議室に移して山泉進氏による記念講演。こちらも百名を超える参加者があつた。講演要録は四ページに掲載。非戦の碑は伊予青石に黒御影石をはめ込んだもの。高さ二・二、横一・六メートル。建立にかかった経費三百万円(目標)に対し、寄付は十一月末現在全国四六一名から計四四万円集まった。交流のある韓国国民文化研究所からも送られて来た。顕彰会会員の皆様のご協力に感謝申し上げます。

吾人は飽まで戦争を非認す
之を道徳に見て恐る可きの罪恶也
之を政治に見て恐る可きの害毒也
之を経済に見て恐る可きの損失也
社会の正義は之が爲めに破壊され
萬民の利福は之が爲めに蹂躪せらる
吾人は飽まで戦争を非認し
之が防止を絶叫せざる可らず

碑文

約三年後の二〇二五年一月十五日は坂本清馬の没五十年にあたることから、今回寄付の残金等によつて清馬顕彰碑も建てるところを計画。場所(台座)は今回の非戦の碑の隣に確保しています。

記念展

「秋水からのメッセージ」ほか

秋水生誕一五〇年を記念し、四万十市は企画展「秋水からのメッセージ」を開催中。会期は十月三日から二〇二二年二月二日まで。四万十市立郷土博物館(為松公園)で。

秋水企画展は二〇一一年、秋水刑死百年記念事業以来一〇年振り。今回は秋水の直筆の書(漢詩)や書簡を中心としており、秋水の生の熱量を感じることができま。目玉は、秋水がサンフランシスコに渡り帰国の際、無政府主義者の同志ジョンソンに贈った書で、このほど秋水縁者の兼松家から市に寄託されたもので初公開です。

また、四万十市は市立図書館内の秋水資料室(常設展)についても同時に展示の入れ替えを行いました。さらに、高知県立文学館(高知市)においても、二〇二一年十一月二十七日、二〇二二年一月二十四日、「生誕一五〇年、幸徳秋水展」を同時開催中です。



四万十川のほとり “非戦の碑” 建つ

大逆事件の真実をあきらかにする会 世話人 大岩川 嫩

「これが私にとって、幸徳秋水のふるさと土佐中村への最後の旅になるかも知れない。そう思いながら、羽田を発つ日航機に搭乗したのは十一月二日の午後のことであった。ことし米寿を迎え、足腰の弱りを自覚しての旅立ちである。幸い、頼もしい友人・宮本直実さんが同行してくれることになっていた。

東京に事務局を置く「大逆事件の真実をあきらかにする会」の歴史は一九六〇年の設立以来六〇年以上となる。発足当時は最少の会員の一人であった私が、いまでは最年長の一人となっていました。多くの先達の方々は世を去り、この中村の為松公園に幸徳秋水「絶筆の碑」が建立された一九八三年の除幕式に東京から出席した塩田庄兵衛さん、大原慧さんのお二人もいまは亡い。

ことしは、幸徳秋水生誕一五〇年にあ



山泉進氏(左)と

たる記念の年、「非戦の碑」は地元「幸徳秋水を顕彰する会」の尽力で、ひろく全国から寄金を募って建立された。除幕式の十一月三日午後、正福寺境内には参加者で埋め尽くされた。除幕の綱が引かれて予想以上に大きく立派な碑が姿をあらわすと、感嘆のどよめきが起こった。

刻まれていた八行の文字は、幸徳秋水が『平民新聞』に書いた論説「吾人は飽くまで戦争を非認す」の一節から採られている。ときあたかも一九〇四年一月十七日、日本軍の仁川上陸で日露戦争の火ぶたが切られる二月八日の直前のことである。いまから一二〇年近く前、朝野を挙げて戦争熱がおおられているその時に、あくまでも堂々と非戦を叫んだ先覚者の信念と勇氣に、いまさらながら大きな感動を覚えずにはいられない。それから歴史の中で、いやというほど戦争の惨禍を体験してきた私たちの日本人に、最近の政権はまたもや「戦争のできる国」にしようとする画策している。その今だからこそ、この碑を建てるひとしおの意義があるのだ。とはあいさつに立つた方々が異口同音に語られたことである。参列者の誰も胸に響いたことだった。

「ほんとに、来てよかった」と繰り返すし心につぶやきながら晴れ渡る秋の空を仰ぐ。あらためてこの四万十川のほとりに生まれて激しく生き、「罪人又布衣の貴きを寛ゆ」との心境を遺して刑死した幸徳秋水の生涯を知り得た幸せを思った。

歴史刻む一瞬に立ちあえた

大逆事件を明らかにする兵庫の会 井上 力

車窓から白浜海岸の東屋ごしに水平線がくつきりと見えていました。幸徳秋水も若くして神戸の人となった岡林寅松も小松丑治も、見ていたであろう大海原と水平線。そして四万十市に入ると津野公男さんの案内で佐田沈下橋へと向かい、草紅葉が沈みゆく夕陽に映える瞬間を見ることができました。

準備していただいた交流会では、大岩川嫩さんをはじめとする多くの方々のお話をお聞きすることができました。正福寺の月城嘉長住職とも親しく会話を交わしました。兵庫からの一〇人もそれぞれ、のたたかひの報告を交え、自己紹介をしました。

除幕式と山泉進さんの記念講演で抱いた思いは、歴史を刻むその瞬間、その場に立ちあっているという感動でした。同時に二つの目標について考えました。一つは大逆罪と不敬罪を消して三四年世に、歴史を改ざんする試みは、安倍スガ政治の九年間に燃えさかり、それを止める活動は、なお正念場にあります。さらに、刑法七三条などを空白にしておく



大逆事件を明らかにする兵庫の会
2021年11月3日/正福寺境内
撮影：永田恵

のではなく、犠牲者への謝罪と反省の条文を刑法に追加する大きな国民運動が求められているのではないのでしょうか。取り調べの可視化への日弁連の運動をひろげて……

兵庫の会発行の「ツアー実行委員会ニュース」に感想文を載せました。その冒頭に水溜丹都子さんは次のように書いています。「もしも現世まで命承りえておられたら、今の私たちに何を語られたであろうかと思いを馳せる。過去から何を学んだのか、時代が逆行していることに注意せよ、一番大切なものを見失うな、と嫩を飛ばされるだろうか」

誠にまなぶこと多い二日間でした。第五回サミットで神戸へ、急ぎ立てられた二日間でした。幸徳秋水を顕彰する会の皆様のご尽力に、あらためて感謝し御礼を申し上げます。

さて最後に、試みた映像の「中継」についてご報告をします。

当初、私たちは二〇人の小型バスで除幕式への参加を準備していましたので、なお感染状況が改善されないなか、参加人数を抑え、代わって足止めした仲間にはズームの中で中継を試みようということになったのでした。

現役世代の仲間はズームミーティングの経験者も、いろいろ教わりました。準備期間の関係もあり、また全国各地で一、二、三日は、憲法集会が開かれており、受信者も決して多くはありませんでした。途中、雑音が入って聞き苦しかったのですが、皆さん優しく見守ってくれました。

幸徳秋水先生の遺跡を巡って

東京 弁護士 川島 仟太郎

祖父川島仟司(明治九年生、大正六年没)が大逆事件弁護団(大石誠之助)の末席を勤めたことから幸徳秋水先生(以下大略)との縁が生れ、秋水が明白な大逆罪事件の首謀者として非業の死を遂げたと知り、昨年「秋水の顕彰会」に入会しました。

秋水はあの明治初めに何故自由・平等・博愛の社会主義思想に辿り得たのか、現在も多くの人が秋水の生き様に強く惹かれるのは何故か、秋水が野蠻な大審院判決により処刑台に立った時の心境如何などに強い関心を引かれました。

今回、初めて秋水の苔生した墓石の前に立った時、深い畏敬の念と共に非業な結末を想い、自ずと深く頭をさげました。秋水は中学校中退の学歴でマルクスの資本論出版後僅か約十年後に英文書で読破し、資本主義の矛盾、社会主義の正当性を我がものとし、平易な格調高い「二十世紀の怪物 帝国主義」、「社会主義神髓」等を執筆したことを見ても、秋水は突然変異による超天才人ではなかったかと思えます。



秋水絶筆碑の前で

この度、除幕された「非戦の碑」の訴えは当時及びその後の日本の辿った歴史を振り返られれば、秋水の鋭い洞察力と勇猛心に驚嘆せざるを得ません。

今年は秋水生誕一五〇年で、この間日本近・現代史を俯瞰すれば、先の敗戦時の一九四五年はその中間年に当たり、

前半の七五年間は、第一回帝国議会で山県首相の帝国主義礼賛の施政方針演説の通り、その後の日本は日清、日露戦争、満洲事変、日中戦争、アジア太平洋戦争と刻き出しの帝国主義侵略戦争の連続でした。後半の七五年間は、日本の惨敗後、東西冷戦の中で米国に強要された安保条約で日本全土を半ば支配されて来た実情でした。更に安倍・菅・岸田政権は安保強化、九条改悪、軍事費増額政策等で日本は現在の戦争への道を急進しつつあります。この時期に秋水の「非戦の碑」を建立したことは、誠に時機を得た好企画でした。

秋水の処刑時の心境を読んだ「絶筆漢詩の碑」の前に初めて訪れた時、改めてその澄んだ心に触れ感銘を受けました。

秋水の死生観は、著作「死刑の前」に依れば「死に至る生き様が社会的価値ある人生であれば処刑による死でさえ十分の安心と満足で以て就くべし」とあります。秋水の四十一年の人生は、思い返せば正に右の通りであり、その自負と得心が在ったからこそ、処刑の時「如是而生、如是死」との安心と満足の意を込めた絶筆を記し得たのでしょう。

今回の秋水遺跡の旅は誠に感慨深い旅となりました。主催者皆様のご尽力に改めて感謝申し上げます。

幸徳秋水の墓参

千葉 市原歌人会 逸見 悦子

その年の旅(二〇一八年)は珍しく宿泊先を確保しただけの気まぐれな旅だった。現在は四万十町と呼ばれているが、私の生まれた旧窪川町で義兄の一年祭を終えから始まった。

旅の行程は七月初旬、栃木県で生まれ四国をほとんど知らない甥が同行していたので、坂本龍馬の脱藩の道を歩き、梶原から天狗高原へと案内した。

翌日は風力発電の風車を見上げながら愛媛県の内子へと足を延ばした。途中の道の駅でひと休みして、脇川沿いに下り、宇和島へ向かった。

宇和島では高野長英の住いだったという簡素な建物を見学して、長英の逃亡の顛末を話しながら、次第に歴史を辿る話に熱がこもる。

幕末から土佐には時代の流れを変えようとする反逆精神が旺盛だったのか、自由平等、平和と繋がってよく愛する強固な意志が脈々と繋がっているような県民性なのか。坂本龍馬であれ、板垣退助、幸徳秋水と思いつく限り人名を列挙しているうちに四万十市に着いた。私自身も、一条公のご城下としての浅い知識しか持ち合わせていなかった。

翌朝は涼し気な木陰を城山へと向かった。秋水の顕彰碑に向き合いながら彼の描いた理想の社会とはどのようなもので



亀戸天神
中江兆民碑で

あったのか、大逆事件の犠牲とならなければどのように歴史は変わっていったのだろうか。想像は果てしなく平和への願望となる。この中村に来て墓参しないで帰ったなら後々まで悔が残ると、地図を頼りに探し歩いた。

子供の頃、「幸徳秋水と言うて頭のずば抜けて良い人がおったぞうな。けれど、その人の名前前は大きな声でいいよつたらひどい目に合う話さげれんと」。おとなの話聞きかじって記憶の中に封印されたままだった。

そんな彼の名前を新たに聞いたのは意外な場所であった。新潟県で開催された短歌大会の席上だった。上越市には平出修という明治時代に活躍した方の「新婚の家」保存会という会がある。その平出修が土佐のはるばると交通の不便な中村へ度々出向いたという話にとっても興味を持った。何があったのか?同時におぼろしくなっていた幸徳秋水の名前とその大逆事件の弁護人が平出修であったことを知った。

息子が甥にそんな話を聞かせて歩くうちに、谷あいの少し陰った窪地にある秋水の墓碑にたどり着くことが出来た。

明治から今日までの長い年月、こうして彼の行動に敬意を表して事実を目の当たりにして、私達もその先、彼がもつた行動を少しでも語り繋げるものが出来ればとささやかな願望を持つことになった。

梅雨明けの空を見上げ、四万十川に架けられている赤い鉄橋を振り返りながら中村を後にした。

訂正 三〇号(前号)「杉並で秋水
平民新聞の非戦の志を受け継ぐ」
橋浦康雄(誤)→泰雄(正)

幸徳秋水の遺産(レガシー) 生誕一五〇年を記念して

大逆事件の真実をあきらかにする会 事務局長 山泉 進

私は昭和二二年、ここ中村に生まれまして。ふるさとに帰れることはうれしく、小学、高校の友人たちにもたくさん会えました。この場所(市立文化センター)には昔は女学校があり、柔道の練習に来た記憶があります。

さて、今日のタイトルを「幸徳秋水の遺産(レガシー)」としたのは、わが郷土が生んだ秋水は、かわいそうな人、犠牲者ではなく、時代の先覚者であり、立派な人だったということに誇りを持ってほしいし、また秋水から受け継ぐべきものは何か、という話をしたいと思っただけです。

今日の資料として、秋水が発行した週刊の平民新聞の創刊号と第十号をお配りしています。まず、一九〇四(明治二七)年一月十七日付の第十号から話を始めます。この号の第一面は、五段組になっています。一番上の欄には、「生ける道德」として秋水の師中江兆民の著『三酔人経綸問答』の中の戦争を否定する考えの部分が引用されています(秋水は「洋学紳士」の立場)。秋水は兆民を父のように

思い、その思想を受け継いでいます。龍馬・兆民・秋水というのが土佐の先覚者の流れだと理解できるかと思いますが、二丁目からは主筆の秋水(無署名)が書いた社説(論説)「吾人は飽くまで戦争を非認す」が掲載されています。その一節に今日除幕された碑文に刻まれた文章がでてきます。社説は時は来たり、真理の爲めに、正義の爲めに、天下萬生の利福の爲めに、戦争防止を絶叫すべき時は来れり」で始まっています。(全文読み上げ)

明治政府は二月四日御前会議で日露開戦を決めます。六日、国交断絶。十日宣戦布告しますが、八日には先制攻撃で仁川上陸、旅順港攻撃をします。まさに日露開戦前夜に秋水はこの文章を書いたのです。秋水の言う「非戦」とは当初は「開戦」に対しての言葉です。しかし、秋水の非戦論は、ただ戦争がいやだというのではなく、どういふ根拠に基づいて戦争を否定しているのか、そのことを考えてみる必要があります。

平民新聞の創刊号(明治三十六年十一月五日)の冒頭には「宣言」を載せています。

- 一、自由、平等、博愛は人生世に在る所以の三大要義なり。
- 一、吾人は人類の自由を完たらしめんが爲めに民主主義を奉持す。
- 一、吾人は人類をして平等の利福を享けしめんが爲めに社会主義を主張す。
- 一、吾人は人類をして博愛の道を尽さしめんが爲



市立文化センター大会議室

めに平和主義を唱道す。

「民主主義」という用語は現代では解りにくいのですが、その面の下の段に英文欄ありますので、それをみていただくと「Democracy」の訳があてられています。これは天皇制のもとでは、君主に主権があり、国民主権という意味での「民主主義」という言葉が使えなかったから「平民主義」という言葉になったというわけです。また、「社会主義」という用語は、現在の水道事業のように、公共性の高いものは公有化をして経営するという考え方です。

「平和主義」についてみれば、ロシアのトルストイも日露戦争に反対しており、秋水と堺利彦がロンドン・タイムズに掲載された非戦論を訳して平民新聞に掲載しています。トルストイの非戦論はキリスト教信仰(神の意思に従え、汝の敵を愛せよ)に基づいたもので、監獄に入れられてもいいから徴兵を拒否し、戦争に要する税金を支払うな、というような内容になっています。しかし、秋水は「神」を信仰していないので、「そこまでは言えない。二月十四日付「兵士を送る」は、アイロニーを込めた表現で、君たちは口ポットのように戦争に行かざるをえないが、敵に乱暴はするな、という言い方に止まっています。秋水にとって、戦争はトルストイのいうような信仰の問題ではなく、競争を原理とする経済組織の問題で、その資本主義という経済組織を変えないかぎり、戦争を防ぐことができない

という考えであったわけでは

同時多発テロ以後、国家間の競争ではなく、テロとの戦いが強調されています。また、北朝鮮や中国脅威論を背景にして、正しい戦争(正義の戦争)が正当化される風潮が強まっています。そして、憲法九条は夢物語であるというように、霧困気が広がっています。同時に、他方では、本当の安全は軍備では保障されない「一人間の安全保険」という考え方が、緒方貞子さん(国連難民高等弁務官)らによって唱えられています。「戦争のない状態」は「消極的平和」であり、食糧安保といわれるように、格差、貧困、差別等の構造的暴力のない状態を「積極的平和」とする平和論も唱えられています。

日本国憲法の理念は積極的平和主義です。向うが攻めてくるから軍備を増強しろ、家に空き巣が入るかもしれないから気をつける、という考えではありません。日本が軍備を永久に放棄するということの原点は、戦争のもたらす悲惨さを考えて、もし敵が攻めてくれば戦争の不当さを訴えて死んでもいい、敵の弾にあたるのもいい、軍備強国のまねをするな、人間道德の先にある将来の「美」に生きる、その覚悟をもつということにあったはず。

中村が生んだ先覚者秋水は絞首刑になりましたが、さきほど詩吟でうたわれた絶筆の言葉のなかに「布衣の尊き」という言葉がありました。平民の平凡な暮らしを尊いもの、大切なものと考えて生きる、それが革命家・幸徳秋水の思想のいきついた先でありました。

今日、為松公園の絶筆の碑に続いて二つ目の碑ができました。兆民が主張し、秋水を受け継いだ、絶対戦争反対、絶対平和主義、絶対非戦主義という考え方をぜひみなさんも理解していただきたいと思えます。(十一月三日記念講演要旨)

平民新聞

創刊号(明治二七年一月十七日付)の第十号から話を始めます。この号の第一面は、五段組になっています。一番上の欄には、「生ける道德」として秋水の師中江兆民の著『三酔人経綸問答』の中の戦争を否定する考えの部分が引用されています(秋水は「洋学紳士」の立場)。秋水は兆民を父のように

思い、その思想を受け継いでいます。龍馬・兆民・秋水というのが土佐の先覚者の流れだと理解できるかと思いますが、二丁目からは主筆の秋水(無署名)が書いた社説(論説)「吾人は飽くまで戦争を非認す」が掲載されています。その一節に今日除幕された碑文に刻まれた文章がでてきます。社説は時は来たり、真理の爲めに、正義の爲めに、天下萬生の利福の爲めに、戦争防止を絶叫すべき時は来れり」で始まっています。(全文読み上げ)

明治政府は二月四日御前会議で日露開戦を決めます。六日、国交断絶。十日宣戦布告しますが、八日には先制攻撃で仁川上陸、旅順港攻撃をします。まさに日露開戦前夜に秋水はこの文章を書いたのです。秋水の言う「非戦」とは当初は「開戦」に対しての言葉です。しかし、秋水の非戦論は、ただ戦争がいやだというのではなく、どういふ根拠に基づいて戦争を否定しているのか、そのことを考えてみる必要があります。

平民新聞の創刊号(明治三十六年十一月五日)の冒頭には「宣言」を載せています。

- 一、自由、平等、博愛は人生世に在る所以の三大要義なり。
- 一、吾人は人類の自由を完たらしめんが爲めに民主主義を奉持す。
- 一、吾人は人類をして平等の利福を享けしめんが爲めに社会主義を主張す。
- 一、吾人は人類をして博愛の道を尽さしめんが爲